劇あそび

海に落ちた麥わら帽子

村井トミ

◎指導にあたって

㈠ 目標について

・子供達が興味を持ってこの劇あそびを中心にして、皆で楽しく遊べること。

・遊び乍ら自然に言語の使い方が出来る様になること（誤った言葉、乱暴な言葉、下品な言葉の認識や、正しい発音で話すこと等）

・セリフのやりとりを考えたり、音楽によって自由に表現したりする事によって創作意慾をもりたてること。

・人の前で恥しがらずに発表すること。

・人の発表を静かに楽しんで聞くこと。

㈡ 取材について

・既成の脚本を使う場合。

劇あそびの脚本があっても、それをそのまま幼児に与えず、幼児から考えさせ引き出したものにすること。出来上った脚本はどこ迄も適当な助言や刺激を与える為の先生の一つの参考に過ぎない事を念のため附け加えておく。

・或る童話等を元にして、先生と子供達と協力して考え乍ら作っていく場合。

・子供達の日頃の自由遊び、ごっこ遊びの中から材料をとって、劇としてまとめたもの。

・或る題だけを決めて創作していく場合。例えばクリスマスの頃に「サンタクロース」という題をきめてつくる等。

大体右の四つが考えられると思うが、この「海に落ちた麦わら帽子」は二番目に相当する一例である。

◎指導の実際

いつだったか何年も前に、何かの本で「海に落ちた麦わら帽子」という童話を読んだ事があった。その時、何と可愛いい話だろうと、ほほえましい印象を覚えている。

七月の或る日、子供達と魚つり遊びの魚を作っている時、ふとこの話を想い出した。そうだ——あの可愛いい話を元にして子供達と劇あそびをして遊ぼう。きっと喜ぶに違いない。そう思うと一刻もじっとしていられない。子供達が帰った後、早速図書をあさってみたが、どの本にもこの童話はのっていなかった。所々忘れた所があるが、これが又かえって子供達に考えさせるよい機会であると思うと、変な事だが本の無かった事がかえって嬉しくなったりした。

——指導過程——

・先ず最初に子供達と劇をして遊ぼうという話し合いをする。今、皆でお魚をつくっているからお魚の劇にしましょうという相談がまとまった。

・そこで先生が可愛いいお魚の話を知っているから、これからしてみましょう。忘れた所もあるから皆で何かいい事を考えて下さいね。と言ってこの話を想い出し乍らした。

・登場させる魚は、どんなお魚がいいか、皆の好きなものにする事にした。とび魚、まぐろ、鯨まで出たが、結局、鯛、いわし、たこ、いか、しまだいに決まった。面白い事にこれらは魚つり遊びに製作中の魚の種類だったので一人でおかしくなったりした。

・配役を決めたりするのは一番後まわしにして出て来る順に従って、皆がどの役にもなって自由表現をして遊ぶ。（波がよせていれば皆が波になって踊る。皆がいわしになって泳いだり、皆が鯛になって赤ちゃんを寝かせたりする）

・先生は、たこなら、たこらしいゆっくりした曲を、又いわしなら速い曲でという様に適当な曲を弾いてあげて、子供達にその感を深める様に心掛ける。音楽の影響の大きい事は今更いうまでもない事だ。

・この様にして遊んでいる中に、自然に言葉が必要になってくるので、皆で何と言ったらよいか、何と返事をしたらよいか等考えさせる。

・何度もくり返し遊んでいる中に、先生からも子供達からもだんだんいい想いつきも加っていく。勿論一日で出来上るのではなく、適当な所で打ち切って明日又続きをするという様にする。配役がきまって不完全乍ら一通り劇の形になるのは少くも四、五日はたってからになるわけだ。

・次には自分のなりたい役の時だけ出てする。たこにもなりたいし鯛にもなりたければ、どちらにも出るとい

う様に、一つの役を限定しないで思う存分に遊ばせる。（一人の役の時に六人も七人もなっても、かまわない）

・はじめて配役の相談をしてどれか一つの役を選ばせる。出来るだけ自分の希望の役にさせる。

（五才児の場合には、黒板に魚の絵をかき、なりたい魚の下に自分の名前を書いたり、かかせたりするのも興味を深める一つの様だ）

一人の役に何人もなりたい時は、じゃんけんをしたり、くじを引いたりして決めるとあまり問題も起らずにすむ。その代り何回か遊ぶと又役を交替してする。

・自分の役が一応きまるとお面をつくらせる。画用紙をあたえて各々の魚を自由にかかせる。同じいわしでも子供によって大きいのや小さいの、太ったのに細長いもの等出来て、かえって面白味がある。

・小道具は麦わら帽子、つり竿、岩、鯛の赤ちゃん、海の背景が必要なので、利用出来るものは利用してつくる。

（麦わら帽子は昔、私が畠で使った物が丁度あったのでそれを使う事にした。つり竿は竹の棒に紐をつるした。岩はボール紙に画き、箱積木の前につけた。海の背景はポスターカラーで大きい紙に波をかいた。鯛の赤ちゃんは魚つり用につくった鯛を使った）

・帽子が海に落ちる所をどうするか考えたが、結局、糸を帽子につけて置き、引っぱる事にした。

・又、帽子が何に見えるか、お茶碗、手さげ等と、子供達の言った通りにした。

—劇のあらまし—

この様にして出来上った劇の骨子を記してみよう。各々のセリフや、細い点は「劇あそび脚本集」を参照していただく事にして、ここでは省略する。

・先ず波になった子供が横に一列に手をつないで波の曲に合わせて、波のよせたり返したりする表現をする。色々の魚達が波の前を泳いで通り過ぎる。曲が小さくなるにつれて幕の中へ。

・おじさんが、つり竿をかついで岩の所へ出て来て魚つりをする。時々竿を持ち上げたり、又海の中へ投げ込んだりする。

・おじさんが「なかなかつれないな、風がひどくなって来た」と言っている中に、幕の蔭から麦わら帽子を引っぱる。帽子が海に落ちて動いていく。おじさんは困ったと言い乍ら帰る。

・いわし達が曲にのってスースー泳いで出て来て、帽子を見つけて何だろうとさわぐ。色々帽子に聞くが返事をしないので、いかのおじさんに聞

きに行く。

・いわし達に呼ばれて、速い曲でいかのおじさん達が次々出て来る。いわし達は、変な物が落ちていた事、何だかわからないので聞きに来た事を話す。

いかは帽子を受け取って覗いたり逆にしてみたりして、お茶碗かもしれないと言ってくれるが、いわし達はお茶碗にしては大き過ぎて変なのでたこの所へ聞きにいく。

・たこのおじさんは、ゆっくりした曲に合わせて手をふり乍ら出てくる。いわし達は又前の様にわけを話して何でしょうと聞く。たこは、えーとえーとと首をかしげたり腕組みしたりして考えるばかりでわからない。

・今度はしまだいの叔母さんの所に聞きに行く。しまだいさんは早い曲にのって、ひらひら泳いで出てくる。手さげにしては変だから。物知りのかつおのおじさんに聞いてごらんなさいと教える。

・かつおのおじさんは、すぐ「ゆりかご」と教える。この中に赤ちゃんを入れて、ゆらゆら動かすのだと言う。いわし達、喜んで感心する。

・丁度鯛のお母さんに赤ちゃんが生れたのでお祝にあげる事になる。鯛のお母さんは嬉しそうに赤ちゃんを中に入れて子守唄をうたう。

・色々の魚達、波達、皆出てきてお祝を言う。

この場合は、魚つりの製作から劇あそびに移ったが、反対に劇あそびから海の色々の魚をつくって遊んだり、水族館を計画したりしてもいいし、人形芝居や紙芝居をつくる方に（製作と言語活動）発展していってもよいと思う。

又観察の面では魚づくし等、海や魚に関しての絵本を観たり、遠足等で水族館をみる機会があれば尚よいが、ぱく然として知っていた色々の魚に対しての認識を新にする必要がある。大人でさえ、今更考える事も少くないのだから——。

（お茶の水大附属幼稚園）

—他の課題との関連—

近刊予告

文学博士　武政太郎　先生序
玉成幼稚園長　有院扁良　先生著

恩物の理論と実際

A五判三二〇頁
予価　四〇〇円
箱入上製本
〒三二円

フレーベル先生が創造された恩物について、著者の多年の研究の結果が、平明に説かれている。恩物の研究家、ならびに幼児教育者必読の書！

株式会社
フレーベル館